

クラブ活動への地域参画をきっかけとした学校改革の あり方についての一考察

葛上 秀文

(キーワード：クラブ活動、地域連携、学校改革)

1 はじめに

2002年の学習指導要領の改訂に伴い、学校教育は大きな変貌を遂げた。完全学校5日制による授業時数の削減、それに伴い学習内容が大きく削減されるのをはじめ、総合的な学習の時間が新設された。また、前回の改訂をふまえ、「生きる力」と呼ばれる新しい学力観が目指されるようになった。しかも、今回の改革は、これまでのように「上からの」改革ではなく、「下から」改革していくことがめざされている。つまり、学校が中心となって、地域の特徴を加味しながら21世紀にむけた教育改革を進めていくことが求められているといえる。

今回の改訂のねらいを、1997年に出された教育課程審議会の答申から拾い出すと、次の4点になる。第一に、「豊かな人間性や社会性、国際社会に生きる日本人としての自覚を育成すること」、第二に、自ら学び、自ら考える力の育成、第三に、「ゆとりのある教育活動を展開する中で、基礎基本の確実な定着をはかり、個性を生かす教育を充実すること」、最後に、「各学校が創意工夫を生かした特色ある教育、特色ある学校づくりを進める」である。上記4つのねらいと特別活動の関連について、宮川(2001)は次のように説明している。第一に、豊かな人間性を培う教育活動としての集団活動の一層の充実が図られねばならないこと、第二に、自ら学び、自ら考える力の育成は、教科だけでなく、学級集団の一因としての自覚を持ち、よりよい学級の集団生活を創造する場面でも活かされていくように配慮すること、第三に、ゆとりのある教育活動を展開するため、特別活動も内容ごとに指導の重点化を図るなど、精選の工夫に努め、ゆとりの中でじっくり活動できるように配慮すること、第四に、特色ある教育内容を創造するため、総合的な学習の時間と関連させながら、地域、学校、児童の実態に応じた教育活動を展開するよう配慮する必要がある。このように、指導要領の改訂に伴い、特別活動もそのあり方を大きく問い直す必要がでてきた。

特別活動、その中で特にクラブ活動が大きく変化した。完全週五日制が始まり、授業時数の削減が求められるようになり、部活動が存在する中学、高校で、クラブ活動

の時間が削減されるようになった。また、小学校においても、従来、4年以上に70時間設定されていた特別活動の時間が35時間に削減され、実質、クラブ活動の時間が、明確には保障されなくなった。ただ、クラブ活動は学習指導要領の中で特別活動の一部として挙げられ、「主として第四学年以上の同好の児童をもって組織し、共通の興味や関心を追求する活動」として明記されており、小学校では実施するための配慮が必要である。その他の特別活動は、どちらかといえば、個人の興味、関心というものが二次的になるのとは異なり、クラブ活動は、子どもたちの興味が比較的優先される。また、その活動を子どもが自発的、自治的に行うことが特質として挙げられてきている。そして、異年齢による縦割り集団であることも、クラブ活動の大きな特徴である。

だが、現実には、教師の数の問題やそれぞれの能力の関係で、子どもの希望するクラブを設置できなかつたり、希望が多数になり、希望をかなえられない子どもが多いという問題がある。また、子どもの自主的活動も、教師が年間計画を立て、子どもはその通り動くという形が多いのは否めない。さらに、異年齢による縦割り集団も、それを積極的に活用するというより、学年ごとに集めて活動するという場合が多い。宮川の指摘にもあるように、新指導要領になって、特別活動の持つ意味合いが大きくなっているが、具体的にどのように変えていけばよいのか、十分研究が進められていない現状がある。また、単なるクラブ活動の改革ではなく、それを踏まえ、学校と地域の関係を問い直すことが必要となるが、それについても、十分言及されてこなかった。

そこで、本論文では、高槻市立北清水小学校におけるクラブ活動の事例をとりあげながら、それを契機とした学校と地域の関係の変化の過程を明らかにし、その可能性を考察したい。

2 地域連携の構築段階—ふれあいタイムを中心に

北清水小学校は、大阪府の北東部に位置する高槻市にある。校区は高槻市北部で、田園地帯が広がる古くからの農村部と、新興の一戸建て住宅が並ぶ住宅地からなっ

ている。北清水小学校では、近年、地域の人材を積極的に活用している。そのきっかけとなったのが、1997年から始めたふれあいタイムと呼ばれる4～6年のクラブ活動である。これは、クラブ活動の講師の人材を地域に求め、サッカー、パソコン、生け花など、その道の熟達者がのべ100名以上関わり、19のクラブが創設された。市内の別の小学校で、2年前からクラブ活動に地域の方を招く試みが始められていた。それによって、クラブ活動が活性化し、児童も楽しんで取り組むようになっていた。その学校の教頭が校長として北清水小に赴任し、ふれあいタイムを企画・実施した。

それまで、北清水小学校でも、クラブ活動は木曜日の6限に高学年のみで行われており、教師が指導を行っていた。そのときの様子について、「聞こえてくるのは、教師の怒声、『何やってる』、『しゃきっとしろ』など。子どもはだらだらしていたし、一生懸命やるという姿とはほど遠かった」と教頭は振り返ってくれた。同じように、当時、高学年を担当していた教師は、ボランティアが行っているときのクラブとの違いについて、「教師が教えてしまうと、サッカークラブでも体育の授業のサッカーになってしまうんです。ぼくなんかやと、まず、準備体操して、それから、と考えるが、ボランティアの人は、軽く身体をほぐして、いきなりシュート練習から始める。最初は、ええんか、とも思ったが、子どもたちの様子を見てみると、授業とは違ってクラブと思ってやっているんだな」と考えるようになったと振り返ってくれた。以前のクラブ活動は、教師にとって見れば授業の延長であり、子どもたちにとっても「喜んで取り組んでいる活動ではなかった」という教頭の言葉でまとめることができる活動であったと思われる。

北清水学校では以前から「地域と共に歩む学校」という目的の下、調べ学習やその他の活動に様々な形で地域の人に登場してもらってきたが、それらの取り組みは単発のものが多く、長期的、計画的に地域の人に関わってもらう活動がほとんどなく、地域にさらに開いていくためにも、そうした活動を作り出していくことが課題としてあげられるようになった。そこで、地域の人に継続的に関わってもらえる活動のありかたを検討していくなかで、クラブ活動を地域のボランティアと協力して行っていくことになった。クラブ活動は、上で述べたような問題点を持っていたし、地域の人も自分の特技を子どもたちに教えるというのであれば、積極的に参加してもらえらるだろうと考えて、計画されるようになった。

ボランティアの方に関わってもらいやすくするために、第一、第三土曜日の2、3時間目続けたクラブの時間が設定されるようになった。学校だより、PTA総会などを通じて、ボランティアの参加を呼びかけた。手品、お茶など、教師だけでは開設するのが困難な様々な種目を新た

に設けることによって、子どもの興味・関心により応じられる形になった。

実際の活動に目を向けてみると、おおむね好評であった。まず、子どもたち自身が積極的に取り組むようになったことが最大の成果として挙げられる。子どもたちはクラブに関心を持っている、とインタビューをしたほとんどの教師が口をそろえて答えたように、子どもたちがクラブを楽しみにしているという話は、子どもからも多く聞かれた。当初、教師の間には、60分に設定された時間の長さを危惧する声もあったが、「指導者の人がどなるという姿はほとんど見られなかった。確かに、だらだらしたり、関心を示さない子どももいたが、その子たちもうまく取り入れながら、上手に指導していただいていた」と教頭が語るように、多くの子どもたちは関心を持って取り組んでいた。また、子どもたちが肩肘張らずボランティアの人に「それどうするの」「もう一回教えて」と素直に聞く姿が目についたと、ある教師は答えてくれた。教師が教えているときは、なかなかこうした姿が見られなかったとその教師は続けて答えていた。さらに、クラブ活動といっても、自分の興味関心を持つクラブを選択するというより、日頃の友だち関係を引きずり、誰がどこに行くか、というところでクラブを選択する子どもが多かったが、自分の関心でクラブを選択する子どもの割合がかなり高くなったと教師は感じ、多くの手応えを感じるようになった。ボランティアの方も、子どもたちに教えることで、楽しみを見つけていると答える人が、特に、高齢者に多く見られた。「私、今小学校で子どもたちに教えてますねん」と、近隣の老人会でボランティアの方が、誇らしげに語っていたと、他の老人の方が教えて下さったように、「地域と共に歩む学校」という観点から見ても、多くの成果をもたらしたといえる。

また、教師が地域の人によるクラブ活動の意義を実感したのも大きな成果といえる。地域人材によるクラブ活動を行うという計画に、当初から教師が積極的に賛成したとはいえない状況があった。上でも触れたように60分間持続できるのか、安全面で問題が起きたとき対処できるのかなど、多くの不安が職員会議などの場でも出された。最終的に具体化することになったが、教師はボランティアが中心となって行うクラブ活動に半信半疑であった。だが、1回目を終えたあと、幾人かの教師に感想を求めたところ、やってよかった、という答えが返ってきた。子どもたちがあれほど関心を持ってやるとは思っていなかったと答えた教師もいた。

開かれた学校というスローガンが出され、家庭や地域との連携を深めつつある現代の学校であるが、外部の者が学校に入ってくることに對する教師の抵抗感は根深いものがある。特に、地域の人を単発的に、教師が意図とした形で参加してもらうことは歓迎するが、今回のクラ

のように、ボランティアが授業の主導権を持ち、教師の意図せざる方向に動くかもしれないというときには強い抵抗感を示す。このような抵抗感を取り除いていくためには、実際に様々な活動を通して、地域の人に関わってもらふことを知り、そのよさを実感することが重要であるが、具体化するまでにエネルギーが費やされ、議論だけで終わってきたことも多かった。今回のようにスムーズに具体化された要因として、管理職のリーダーシップが挙げられる。管理職が率先してボランティアを集め、煩雑な手続きをこなしていくことにより、1回目を迎えることができた。実際に行うことにより、教師たちの評価が変わり、ボランティアによるクラブ活動の取り組みに教師たちも肯定的になっていった。

学校を地域に開くという動きは、北清水にとって、教師の意識を変えただけでなく、地域の人や子どもたちの意識を変えていくきっかけとなった。次節では、学校の活動を地域に開いていく中で、学校がどのように変わっていったのか、その過程をみていきたい。

3 北清水における地域連携の進展

ふれあいタイムをきっかけとして、その後、北清水でどのような取り組みが生まれてきたかみていきたい。

(1) ふれあいタイム

まず、ふれあいタイムの変化をみておきたい。2002年の学校五日制に伴い、北清水小学校においても、ふれあいタイムの時間が水曜の午後に移動した。当初は平日の午後となることで、ボランティアの参加が減少するのでは、と危惧されたが、ソフトボール、サッカー、バスケット、バレーボール、卓球、英語、家庭、パソコン、器楽、工作、演劇、絵画、以後、お茶・陶芸、生け花、漫画、木工、歴史探検、チャレンジと19のクラブが開設され、のべ100人以上の支援を得られた。ここまで発展した理由として、次の3点が考えられる。第一に、クラブ活動を行う高学年の保護者だけでなく、低学年の保護者や卒業生の保護者、地域の人材、さらに卒業生も関わり、ふれあいタイムを支えているため、新しいボランティアの確保が比較的スムーズにいつていることである。第二に、当初はボランティアの特技にあわせてクラブが設定されていたが、歴史探検クラブのように子どもたちの要望でできたクラブが設けられていくことで、子どもたちもふれあいタイムに積極的に関わるようになっていくことである。第三に、年度末の2月にクラブ活動の成果を発表する「公開ふれあいタイム」が設定され、低学年の子どもたちや保護者・地域の人が参観し、子どもたちにはやる気を、保護者・地域の方は、自分たちも何かできるのではと、関わっている人の輪を広げる取り組み

が進められていることがある。

(2) ゲストティーチャー

北清水では、1998年より、学校での授業の取り組みにさまざまな地域の人を招いて、指導してもらふゲストティーチャーの取り組みが始まった。ふれあいタイムをきっかけとして、教師も地域人材の力を借りることが、子どもたちの学習意欲につながると実感したことで、生活・総合を中心として、地域の方の指導を受ける機会が広がっている。昨年度の取り組みからみると、低学年では、手作り絵本を作る、英語で遊ぼうといった活動、中学年では、陶芸や腹話術の活動に、高学年では、米作りの活動などとともに、音楽の楽器演奏の支援や図工の活動の支援に多くの地域の方が関わっている。

(3) スクールアシスタント

2000年より、ゲストティーチャーのように、何か子どもたちに教えることはできないが、さまざまな活動の補助ならお手伝いしたいという保護者や地域の方の声を受けて、スクールアシスタントの制度が整備された。その活動は、給食や掃除時間の補助、総合学習など校外での学習の引率補助や、家庭科の調理実習の補助といった活動の支援を受けている。このような活動に地域の力を借りるのは教師の怠慢ではないか、という考え方もあるが、そこに援助もらうことで、子どもたちの活動の幅が広がったり、教師が子どもと関わる時間が増えることが、結局は子どもたちのためになるという共通理解が地域に根づいているため、多くの支援が得られているのである。その背景には、後でみる学校の授業・学校改革の取り組みが地域に支持され、もっと取り組んでほしいという地域の思いがあり、そのために自分たちができることを見つけていこうという地域・保護者と学校の間にあることを忘れてはならない。

(4) 地域連携部の創設

北清水小では、多くの地域の方が関わるようになり、それに対応するため、2001年より校内組織に地域連携部を位置づけた。当初、地域との連絡調整は管理職が中心に行っていたが、連携の範囲が広がってきたこともあり、地域連携部が組織された。地域連携部では、学校への協力の呼びかけを年度初めに一括して行うことにより、地域の方が見通しを持って関わられるようになった。また、地域連携部が中心となって、ふれあいタイムの運営、年間の人材活用実施状況の集約を進めている。

それ以外にも20分休み時間を活用した読み聞かせ(お話ポケット)、低学年児童対象の朝のお話会など、さまざまな活動に地域の人材が関わっている。次節では、この

ような地域と連携を深めた中で、学校がどのように授業改革を進めているのか、みていきたい。

4 地域との結びつきを活かした授業改革

これまでみてきたように、地域と結びつきを深め、信頼関係を構築していくことで、学校の取り組みもさらに活性化されるようになった。その効果がもっとも発揮されている昨年度の総合の取り組みをみていきたい。

北清水小は、地域との結びつきを強めていき、地域の素材を生かした総合を展開している。今年度は、「心のふるさと北清水」という総合のテーマを設定し、全学年で地域と結びついた単元開発を行っている。

「心のふるさと北清水」という総合のテーマの元、具体的には、次の4点が到達目標として考えられた。第一に、学校を通しての地域の人材の活用である。これは、その場限りで終わる地域と学校の関係ではなく、児童の学習を深めるために、事前の計画、実施、そしてその後の評価も視野に入れた関係作りを目指すものである。第二に、地域の方もふるさとと思える学校にすることである。総合の学習を通して、学校をより身近なものと感じてもらい、学校に来るとほっとできる雰囲気を作ることが目指された。そのため、学校施設も改善が加えられ、地域の方がくつろげるように、中庭にベンチが置かれたり、空き教室を改装して、地域の方がゲストティーチャーなどでこられたとき、待ち時間にくつろげる空間として整備された。第三に、児童も地域の一員として自覚できることである。6年間を通して、児童も地域の一員としての自覚を持ち、自分の役割を発見し、それを実行できる力をつけていくことが目標となっている。最後に、児童がこの学校で学んだことを生かし、将来、それぞれの地域の学校を支える人材となれるようにすることである。地域の人にしてもらって当たり前、という段階から、自らできることを発見するとともに、将来自分たちも学校を支える人材となっていく意欲を育てることが目指された。これら4つの目標を実現していくために、各学年の取り組みが開発されていった。

地域と接点を持った総合を進めていく場合、空間が限定されているため、ややもすれば、児童を飽きさせる危険性がある。北清水小では、地域との関わりについて、低学年は、地域のすばらしさにふれる段階、中学年は、地域の良さや課題を発見する段階、高学年は、地域に向けて発信する段階として位置づけることで、変化をつけるとともに、6年間を見通して、児童一人一人が地域の一員としての自覚をはぐくめるようにカリキュラム開発が進められている。また、それに沿って、総合の中で目指すべき子ども像が、下記のような形で定められ、評価の観点でも6年間が見通されている。

○低学年

自分の身の回りの事象に興味関心を持つ子
自分の考え方を表現していく子
友だちと力を合わせて取り組む子
自分の物や友だちの物を大切にできる子

○中学年

日常の学習活動の中から興味関心を持つ子
自分の考えと共に他者の考えも尊重する子
共同して意欲的に活動する子
地域との交流を通してゴミの減量化やリサイクルの良さを知り、物を大切にできる子

○高学年

視野を広げ自ら課題を見つけられる子
より深く追求し、表現できる子
自分の生き方を考える子
金銭の計画的な使い方を工夫し、生活に使う物を大切にできる子

各学年テーマを設定し、年間の総合の学習を進めている。たとえば、1年では、春に地域の畑で育てられているレンゲを観察に行くのであるが、地域の方が、児童にもっともきれいな状態でレンゲ畑をみてもらいたいという思いから、その観察まで、畑に人が入らないようにし、毎年そのすばらしい景色を1年のために用意している。児童もそのすばらしさに感動し、地域の良さを体験しているのである。

3年は、低学年の間に体験した地域のすばらしさを一歩深めて、自分たちで地域の秘密を探ろうとする活動がくまれている。1学期には、自分たちの住んでいる地域を友だちに紹介するため、その地域の特徴や、友だちがきたときに目印となる建物などをまとめた地図を作り、その後、それを手がかりに、友だちの住んでいるところを数回探検する活動を行った。この活動の時に、保護者に付き添いのボランティアをお願いし、多くの参加が得られた。そのとき、次のようなことが問題になった。探検した日は7月はじめの暑い日で、子どもたちは水筒を持って歩いていた。事前に、教師は、持っていける量は限られており、計画的に飲むように、と注意したが、あるグループの子どもはすぐに飲み終わってしまうという事態があった。しかし、その子どもが困り出す前に、付き添いの方が飲み物を渡してしまった。次の日の探検の時にも、その子は同じように早く飲み終わってしまった。別のグループでも同じようなことがあったが、ここでは付き添いの方は手出しせず、友だちから飲み物を分けてもらったのであるが、次の日に別の地域を探検するとき、その子は飲み物を計画的に飲むようになり、友だちに迷惑をかけることはなくなっていた。活動が終わった後、教師と付き添った保護者の間で話し合いがさ

れ、教師側から、子どもたちが自分で計画を立て、そこで失敗を経験しながら学んでいかせたいという話をしたのであるが、保護者側からは、失敗しないように、手助けしたいという意見が出て、すぐに学校側の意図が理解されなかった。しかし、このことをきっかけとして、ボランティアの方にどのように関わってもらおうのか、ということについて話し合われるようになり、徐々に、学校のねらいを理解する保護者が増えていった。親の希望と学校側のねらいとのずれを浮かび上げらせ、話し合っていく契機となるためにも、保護者に参加してもらい、ともに学習する機会を作る必要があり、その際、地域について学ぶことがよききっかけとなると考えられる。

6年は、北清水小学校をよりよいものにするという目標の下、さまざまな角度からの提言を行った。ここでは、①今自分たちができること、②自分たちの力ではできないが、周りの協力を得られればできること、そして、③将来自分たちがしていきたいことに分けて提言が行われた。たとえば、①については、学校施設の視点で調べたグループが、現在の学校はきれいになったと思うけど、大人にしてもらっていることも多いから、自分たちからもっと学校を大切にしたいという提言を行った。②については、教室のクーラー設置を求めたのであるが、自分たちだけでなく、普段から交流を行っている市立養護学校の子どもにとっても、北清水がもっと過ごしやすくなるという視点から提言された。また、③については私たちがいっぱい地域の人に応援してもらったように、自分の子どもや地域の学校でボランティアをしていきたい、という提言がなされた。どれも、学校を大切に、学校をきれいに、といった抽象的なレベルから、自分たちの問題として感じ、自分たちにできることや今できなくても、将来にわたって達成していきたいという段階にまで踏み込んで考えられていた。これは、1年からずっと、地域と密着して総合を計画し、また、自分たちも地域の一員であることを自覚させようと体系化したプログラムを経験してきた結果と考えられる。

一方、6年の一部が企画チームを作り、研究授業の後に行われた全体会の一部をプロデュースした。従来、全体会は、教師が研究した期間の取り組みについて報告するものが主流であった。しかし、総合の場合、教師がどのように計画したかというよりも、児童が活動の中で、どの程度主体的に考え行動したかが重視される。そのように考えると、教師側の意図を全体会で話すよりも、児童がどう受け止めたのか明らかにした方が、研究が進んでいくのであろうし、全体会の中心の観客である地域の方や保護者には、そちらの方が学校の取り組みが伝わると考えられた。実際、いつもならほとんど残らない保護者が多く全体会に参加し、児童たちが発表する学校の取り組みについて、熱心に聞いていた。企画チームを担当

した児童も、非常に熱心に取り組んでいた。このチームを担当した6年の教師も、「今までの中で一番手応えを感じる。子どもたちから次々といろいろなアイデアが出てくる」と、その様子を語った。子どもたちは、北清水でこれまで経験してきたことを生かしていた。たとえば、昨年度の全体会の時、学校から日頃お世話になっているボランティアの方に感謝状を贈ったのであるが、それをふまえ、自分たちでトロフィーを作り、毎朝、交通量の多い道路で安全指導して下さっている地域の方や、学校の水槽を休みの日に来てきれいにしてくださっている方に、感謝の気持ちとともに贈呈した。この人たちの取り組みは、普段、子どもからはなかなか見えなかったり、当たり前と感じてしまっていたところがあり、その人たちにきちんと光を当てようとしたのである。また、その人たちの様子をビデオで撮影し、友だちや他の学年の児童にも、その人たちの努力を伝えた。このことは、そこに参加していた地域の人にとっても、身近なことで学校のお手伝いができるということをアピールすることにもつながり、これまで以上に幅広い方の協力が得られていくことになると思われる。

5 地域連携とこれからの学校

北清水小学校では、クラブ活動を地域の力で活性化したことをきっかけにして、地域との関係を深めてきた。地域との連携の必要性が、近年盛んに論じられているが、多くの学校で、進んでいないか、形式的なものにとどまっていることが多い。その際、クラブ活動を突破口にして、関係を深めていくのは、北清水の例を見ても、可能性が大きい。北清水が地域連携を深め、教育の活性化を図れた要因をまとめてみたい。

第一に、地域参画をクラブ活動に限定せず、さらにその領域を広げていったことがあげられる。クラブ活動を地域に開くことが目的でなく、学校を地域に開いていくことを手段としてとらえ、本来の目的である、子どもたちの教育をより豊かにするためには、さらなる地域の活用を計るように、学校が常に手を講じていたことが大きい。

第二に、学校の環境を地域の人が訪れやすいように、明るい形に変えたことがあげられる。北清水も多くの学校と同様に、暗い画一的な学校であった。それが、管理職、公務員、地域の方々の協力を得て、非常に明るい学校になっている。学校の玄関は、ラティスを用いてガーデニングが施された感じのよい家庭のような感じになっている。また、中庭には、キャンプ場にあるような木製のいすとテーブルが置かれ、子どもたちや地域の人たちの憩いの場となっている。もう一度学校にきてみたいと思えるような環境を整備することで、地域の方の協力も

大きくなっていった。

第三に、学校が地域に協力を願う段階から、地域も学校のために何ができるかアイデアを出せる体制づくりが構築されたことである。当初は、学校の依頼に応じて、学校を訪れていた地域の人が、子どもたちに教えた後、こんなこともできれば、といったことを学校が積極的に拾い、それを実現していくことで、地域の中に核となる人材が出てきて、その人を通して、参加の呼びかけがなされるようになった。

第四に、北清水では、地域連携だけでなく、算数科を中心とした授業研究でも有名であり、さまざまな面から学校を改革していくという基盤が確立されていることがあげられる。2003年度は、これまでの算数科の取り組みと総合の取り組みを結びつけた新しい算数のあり方が研究されている。子どもたちが算数で学んだことを、日常生活に結びつけて考えないことが多かった。たとえば、3個のケーキを5人で分ける場合、一人あたり $3/5$ になるが、実際に、ケーキをその大きさに切るのは難しい。そこで、3個のケーキを半分ずつ分けて、5人が一つずつ取り、残りの $1/2$ を5等分することでもケーキを分けられるとしても、その意味が理解できないところがあった。 $1/2 + 1/10 = 3/5$ とできても、それを具体的な場面で示されてもピンとこなかったのである。そこで、日常場面から問題を発掘したり、総合と絡めることにより、算数をより幅広く理解できるように、カリキュラム開発が目指されており、このような授業を変えろという意識が、地域との結びつきを深めていくときにも役立っている。

第五に、地域連携を深めていくために、校内組織を整備することがあげられる。地域からみたとき、学校側に明確な窓口があることは、関係を深めていく際に重要である。地域の接点の一部に限定される危険性もあるが、北清水小の場合、毎年、その担当者を替えるようにしており、多くの教師が地域と関係をとれるように配慮され

ている。

学校を地域に開いて、活性化していくためには、かけ声だけではだめで、さまざまな支えがあって、初めて成り立つものである。北清水の場合、以前から地域との関係が良好で、地域とのつながりが進んでいったのではない。こうした取り組みが始まる前は、「自分の子どもを通して見ると、どれだけ先生がひどかったか」「学校は汚い」という意見を、現在関わっている地域の人が語っている。そうしたマイナスの意識であっても、学校が計画立てて、地域との関係を構築していけば、地域の人々の意識も大きく変わっていくのである。

クラブ活動への地域参画をきっかけにして、学校改革に取り組んでいる北清水小学校を例として、これからの地域連携のあり方について論究してきた。重要なのは、何をやるのかではなく、やることによって、子どもたちがどのように変わるのか、それを判断して、学校としての取り組みの方向を判断していくことであると結論づけられよう。

参考文献

- 池田 寛, 地域教育システムとは何か: 長尾, 池田, 森編, 地域教育システムの構築, 明治図書 11-27頁, 1997
- 池田 寛 地域の教育改革—学校と協働する教育コミュニティー, 解放出版社, 2001
- 葛上秀文 学校五日制時代における学校の役割—「出会い・チャレンジ・わくわく・デー」の取り組みを通して— 鳴門教育大学研究紀要 第15巻, 7-14頁, 2000
- 宮川八岐 21世紀型特別活動の実践構想 明治図書 2001
- 宮久保信一 みて, ふれて, 学び合える地域の学校 部落解放研究 No.147 52-63頁 2002

A Study of the School Reform developed by Club Activities which Community People Participate

— A Case Study of the Kitashimizu Elementary School —

Hidefumi KUZUKAMI

(Key words: club activities, collaboration, school reform)

This article is discussed the process of school reforms at the Kitashimizu elementary school in Osaka. In this school, many community people take part club activities called “Fureai Time”. These Activities is managed by community peoples and teachers support them. At the beginning of them, many activities, especially integrated learnings, library times and so on, participate them and do actively.